

ふり出しへもどる

子供のころお正月いろいろな堂内のみそひ

がまのた目かくしをしておたふくの顔をつ

くるとかかぶりとやとび一つづつ進めて行く

アモか名稱をすれてしるたがせうかく

一つ進めてもお休み又かふり出しへもどる

といろろかまのた

今そのアモを思い去した

足のかわぶの痛た

三年かかるとして水出かと思ひながら

そのアモ牧置したり内科薬の水袋の薬アレス

とよをアチチりしたか指か液純が去て来

てどうにもなうなく有りぬア種へ行つた

そこで^耳鉛^数高^音が去て二週毎毎の午花

そして^皮ア種へ行つた^子れいた有りア

ぬ^耳ア種^耳なく^子れいた有り

アモを^心へ^心今迄の三年内はアモ

アモアモかと思つたアモ^心に^心は^心

だつたが^心は^心長くアモ^心に^心

足の甲に^心びりれア種^心ものが^心去けい

ハルバリの一人もこれに「アカギしにわていさ
 悪鉛軟膏で乾癬したや」と言ひ私もそうだと
 思ふ「オリーブオイル」をぬり「にり」して
 てももろ一度使つた種へ行つたやが「いと悪い
 台向通等の雨の中」種へ行つた
 何と「何と」アト「と」でかふよ「た」を「存おし
 左に「ア」で「水」出の「治療」は「二ね」から「だ」と言ふわ
 今度の「水」出の「薬」は「ちか」う「も」や「た
 ろう」で「ん」で「い」に「私」は「ふ」り「出」し「へ」も「ど」ろ「に」なつ
 て「し」や「う」に

看護婦さんに「水」出は「長」く「か」かる「か」う「毎」日「薬」を
 「ア」で「下」さい「わ」そ「し」て「ア」の「用」紙「を」も「う
 う」に「足」の「甲」で「ア」で「なく」指「の」間「足」の「裏」
 足「指」を「か」に
 か「え」り「介」護「夕」う「と」に「の」さ「か」小「雨」に「ぬ」れ「し
 り」心「身」が「冷」え「し」や「う」に